

一、観音石像一体 寺領田端大道脇わきにあり（現在は御堂前へ移転）



観音石像

その後、寺の衰退期もあったようで、朝廷の意向も考慮し藩費で修理その他助成していたようである。

玉林寺には昔から有名な巨鐘があった。安政元年（一八五四）寺社奉行から「諸国の梵鐘にて大砲、小砲を鑄すべし」の布達があったので、藩はこの巨鐘の供出を惜しみ、佐賀白山の高寺と八幡社鳥居の中間の空地に鐘樓を建て城下の「時の鐘」とした。昔は実相院と共に玉林寺へ勅使ちくし下向こうもあり、佐賀藩初期になってから豊臣氏の定めた寺社の

朱印地はすべて私領であって、幕府や本山といえども政治的干渉があつてはならぬことになつていたが、このような布達は幕府が承知してただけで、民間には知らせてなかつたので、朱印寺社であつた玉林寺も一般寺社並みに取扱われたのである。（鍋島直正公伝より）なお当寺に奉藏されている大般若經六百卷については文化財篇の「法物」の所を参照されたい。

三 室町時代

概 説

室町時代は南北朝が合一した一三九二年から足利幕府滅亡までのおよそ百八十年間を指している。足利義満は京都の室町に「花の御所」と呼ばれる華麗な邸宅を造営しここに住んでいたため、足利政権を室町幕府というようになった。義満によって打立てられた將軍の權威は後継者義持の時代になるとようやく没落の兆を示し、次の將軍義教は守護赤松氏によって暗殺され、義政に至つて専ら側近政治に頼り、応仁おうにんの乱を通じて將軍の權威は全く地に落ちたのである。こうして幕府自体も崩壊していった。

応仁の乱を契機として、全国的に起ち上つて新しい権力の座に就いたのはいわゆる戦国大名達であつた。彼等は激しい攻防戦を通じて領国を建設し、城下町を作り家臣や商工業者を集中させ、交通路の整備に努力した。莊園制を否定し、領国の体制下に置き、政治經濟の基礎を固めた。これからのいわゆる戦国時代という。この戦国乱世の時代における大和町周辺の領主達はどうかであつたか。

戦国の世に起こる戦いの原因の多くは城主の征服欲に端を発し、力を持って他を征服し領地拡大を計る事であつた。そのために多くの私兵を使って血を流し合い死んで行くという殺伐な弱肉強食の連続であつた。肥前佐嘉郡から発した龍造寺氏、次で鍋島氏、小城山内さんなか、佐嘉山内、神崎山内に隠然たる勢力を持つ神代氏くましろ、豊後ぶんごより攻め来つた大友氏、小城の千葉氏、佐嘉城周辺の諸領主達による戦鬪の繰返しは、郷土大和町の土を朱あけに染めていたのである。以下年代を追つて主な戦いの跡を振り返つてみよう。

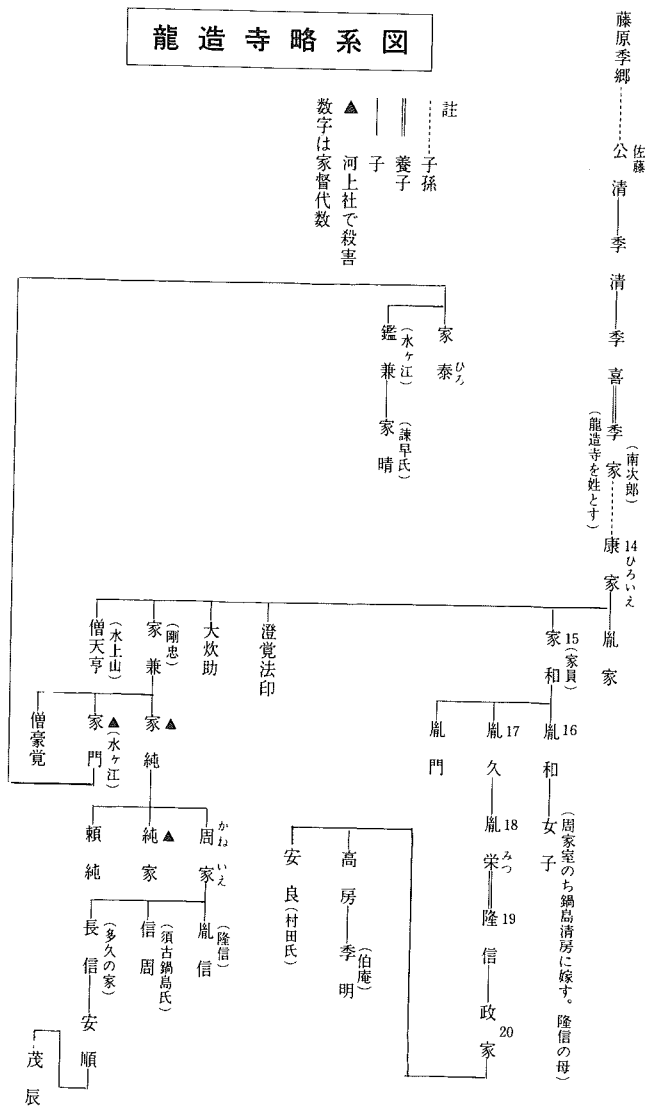
二十日余を過ぎて將軍義政の下知により双方和議が成立した。同年十二月二十三日、千葉胤將以下諸將は彦島の陣營を引上げる時これに火を放った。小城の土兵達はこれは国府勢が負けて逃げるための仕業わざと思い込み急に襲いかかった。国府勢は不意を打たれ大あわて、陣形は乱れ小城勢これを見てときの声をあげて攻めて来たので、国府勢は大敗し踏み止って戦う者は一人もいなかった。宗貞国はこの知らせを聞き、事の意外に驚いたが今はどうする事も出来ず、夜半に尼寺を出て行った。国府の残兵及び老若男女みな金立山にのがれた。これらの者は余りあわてて馬、物具ものぐ、太刀、長刀等陣中へ捨て足のふみ場もなかったという。小城勢はいよいよ勢を得、逃ぐるを追うてまっしぐらに国府へ乱入した。陣屋の火が飛び散り付近の民家、諸寺の堂塔ごとごとく兵火にかかって炎上した。当時府中五山といわれた国分寺、大昌寺(尼寺)、善光寺、宝積寺(築山の南)、北禪寺共に炎上した。中でも大昌寺の本尊薬師如来は昔聖武天皇の詔みことりまうで行基菩薩ぎきぼさつが造ったと伝えられ、九州一の大仏といわれていた仏像であった。その外善光寺の如来、国分寺の無上尊、北禪寺の觀世音、宝積寺の多聞天たもんてんなど由緒ある仏像が一夜の中に灰燼かいじんと化した。この事件はそのころ土一揆合戦ともいった。(北肥戦誌より)

3、龍造寺氏と大和町

龍造寺氏が大和町に関係深いことは、龍造寺一門の天亨和尚が水上山万寿寺の和尚(開山より六十四代勅願第一世)であったという事だけでなく、天文十四年(一五四五)龍造寺一門三名並びに家来達が殺害されたいわゆる「淀姫社頭の悲劇」や神代氏との古戦場として有名な「金敷峠の戦」、龍造寺、神代

両軍合わせて一万五千余騎が川上部落を中心に雌雄を決して血を流した「川上の戦」、あるいは戦国の北九州にあつて大友、島津と九州を三分するに至る基を作った「今山の戦」などすべてが、戦国のころのわが大和町の姿であつて、そのころは常に血なまぐさい闘争が繰返されていたのである。

龍造寺略系図



藤原秀郷の後裔に佐藤公清という者がいる。その子の季清があとつぎの季喜をつれて九州に下向して来て肥前国佐嘉郡小津郷龍造寺村（佐賀市中館）に住みついた。近衛天皇の久寿元年（一一五四）の事で、保元の乱の起る二年前である。季清は肥前に住むうちにやがて鎮西八郎と号して九州に猛威を振った源為朝の手に属して、子の季喜と共にしばしば戦功を立てたという。その季清には男子がいなかったらしく、佐嘉郡春日村甘南備城主高木季経の次男南次郎季家を養子にした。龍造寺系図ではこの季家を第一代としている。龍造寺を姓としたのは養子となった季家が龍造寺に住んで以来のことのようである。龍造寺村というのは、この地に龍造寺という寺があったから生じたものである。天文十七年（一五四八）に城外の白山に移され、現存する高寺がそれである。（佐賀市白山町八幡神社前の禅寺）

龍造寺家十四代の康家には六男一女があった。この中で十五代を継いだのは次男の家和である。十六代が長男の胤和、十七代が弟の胤久、十八代が胤久の子胤栄、十九代が後に九州の山野を震撼させた龍造寺隆信である。この正統を村中龍造寺といった。その居館を村中城と称していた。

今の佐賀西高校付近である。これに対して分家の水ヶ江城というのがある。第十四代康家の五男家兼が父から譲られた地に築城したもので、村中城南の濠の外側に接して築かれていた。康家の末子である僧天亨は大和町水上山万寿寺の六十四代勅願第一世で、神子和尚の再来、中興の師と称された名僧である。墓は万寿寺墓地に、正面の神子和尚五輪の墓とならんで右側に建てられている。

4、淀姫社頭の戦

龍造寺家は従来少武家に属する有力な武将であった。ところが龍造寺剛忠（家兼）の水ヶ江城は突然少武一派の武将二万人の軍勢で包囲された。少武家に対して剛忠が謀叛を企てているというのが理由である。そのような時に水ヶ江城にやって来たのが馬場頼周である。頼周は剛忠に向かつて、

「この包囲は側近のざん言による冬尚公の誤解によることで、剛忠殿をねたんだ者の仕業だからこの際一時城を出て筑後へ行き、周家、家泰、頼純を冬尚公の居城（神埼の勢福寺城）へ遣わし謝罪させ、そして家純、家門、純家を筑前へ赴かせよ」と言葉巧みに説き伏せた。今から四百二十数年前の天文十四年（一五四五）正月二十三日のことである。頼周の謀略とは知らず剛忠は筑後国一木村（大川駅の南）に亡命し、その子家純、家門兄弟と家純の次男純家らは三瀬を越えて筑前へ赴こうとして川上まで来た。二十三日は早や日が暮れたので、明朝出発しようと淀姫社を仮の宿と定め、主従三、四十人が一夜を明かすことにした。

頼周は神代勝利と示し合わせ、頼周は嫡子六郎政員を大将にして三百余人、淀姫社をとりまいてときを声をあげた。家純らは思いもよらぬことではあり、暗さは暗し上下皆茫然としていた。されど家門主従三十余人は南門に走り出て、おのれ悪行不道の頼周、われら一門の手並みの程を見すべしと当たるを幸いに切つて切つて切りまくる。その勢に尻込みして馬場六郎は門外に退却した。この時東より神代勢が雲霞のように都渡城を渡って押し寄せた。家門はなおも戦ったが、ついに家門を始め家来の堀江大膳

亮、片田江七郎兵衛、岡五郎太郎、岡新次郎、新郷伊豫守らことごとく枕を列べて討死した。暗夜の事で家門の戦死を知らぬ家純、純家は淀姫社の社殿にたてこもりかけ出ては戦う。純家は敵が南門を打ち破り社内に入り込んだのを見て、はやこれまでと小指を食い切り流れる血で

「山遠雲埋行客跡 松寒風破旅人夢」(山遠くして雲は行客の跡を埋む、松寒うして風は旅人の夢を破る)と社殿の扉に血書し、庭に躍り出て敵と戦いついに討たれた。家純はこの有様を見て、今はこれまでと腹十文字にかき切り腸をつかんで社殿の腰板に投げつけ落命した。

一方、周家、家泰、頼純の一行は二十三日の夕方佐嘉を出て城原に急いだが、日が暮れたので和泉村の玉泉坊(下和泉の西端)で一夜を明かし、二十四日早朝山伏を案内として出発した。尾崎村の祇園原まで来ると、頼周の家来と神代の軍勢から前後を取囲み襲撃されて憤死した。かくて戦は卯の刻(午前六時)過ぎに始まり辰の刻(午前八時)過ぎに終わったという。頼周は彼の城である勢福寺城の門前に六人の首を埋め、出入りの者に踏ませたといわれている。やがて剛忠は鍋島平右衛門清久とその子の清房(藩祖鍋島直茂の父)とに迎えられ、佐嘉に帰り水ヶ江城に無血入城した。当時頼周は小城の祇園岳にある牛頭城の城主である千葉胤勝を追出し、冬尚のため城の修築にかかっていた。

淀姫社頭の惨劇から三カ月たった三月の終わり、龍造寺、千葉の連合軍は牛頭城を襲い、頼周父子は川上までのがれ川を渡って山内へ逃げようとするのを、野田安藝が槍を振り首をあげた。それが三カ月前にこの川上で龍造寺一門を襲い指揮した馬場六郎政員であった。それをみると頼周はたちまち川を逆

戻りして土手をかけ上るや実相院の下の光明院(今の観音堂の西にあった)へ逃げ込み、加茂弾正に引きずり出されて首をあげられた。首実検の後野田安藝は水ヶ江城の門前に埋めたいと申し出たが、剛忠は狂人のまねをすることはないと、頼周父子の首級を水上山万寿寺と春日山高城寺とにそれぞれ分けて葬りとむらったという。(北肥戦誌、歴代鎮西誌による)

後日、淀姫社の社地の表土を取替え、社殿も造り替えてそのけがれを清めたという。(実相院文書)やがて剛忠は翌天文十五年(一五四六)三月、九十三才で死去した。一門を討たれた後、周家の子で当時佐賀の南郊、宝琳院に入っていた円月という青年僧を還俗させて、水ヶ江龍造寺家を継がせることとなった。これが後の龍造寺隆信で、そのころは胤信と称していた。

5、金敷峠の戦

大和町野口部落より野口林道を車で約十分、徒歩で山の谷合いの曲りくねった旧道らしい道を登りつめると、急に明るく開けて、山脈のうねりの中に名尾の部落が望見される峠に着く。ここが今名尾峠と呼ばれている金敷峠である。ここ一帯で今から四百十余年前の弘治三年(一五五七)春日山城(大和町春日)の攻防をめぐる、神代勝利と龍造寺隆信の血戦が行われた。神代勝利の領地山内は佐賀、小城、神埼三郡の北部深山幽谷の地である。東西二十八キロ、南北二十キロと言われているがそこに要害を十四カ所も構えていた。

本城は三瀬の城山にあって佐賀から約二十八キロの山奥にあるため、山地に馴れない龍造寺軍にとつ

て、これを攻めることは非常に困難な業であった。しかし、山内の入口にある春日山城を弘治三年（一五五七）に占領したので、隆信はここを拠点として山内攻撃をするため、老臣小川信安を城普請奉行として修築させた。九月完成と同時に城番として水町信秀を置いたが、城兵が少ないので後には小川信安の一族小川但馬守、同石見守、同治部少輔らを置いた。神代勝利はこれを知ると「領内に敵を置くことあるべからず」と言って、城の奪回を図り子の長良らと相談して、城兵を城から誘い出そうと陣を構えた。九月中旬梅野帯刀を案内者として春日山城を攻めた。城中はこれを知るや小川但馬守は城兵を二手に分け、一方は城を守らせ他方は弟左近太夫に兵を与えて城外北の峯に登らせ、峯から敵を見下すように



神代勝利画像

して岩石を投げたり矢を放ったりして、敵の進路をさえぎったが、山内勢は山坂に慣れているし少しも屈せず突進できた。先頭に立った帯刀は余り進み過ぎて道を踏み外し、倒れたところを龍造寺軍に捕えられ首をはねられたという。このような事があり山内勢もやや危く見えたが、帯刀の一統は復讐の意味でも城を奪い返そうと進撃したため、城兵も防ぎかねて敗色が見え出し、山内勢二陣の松瀬の一統が横から出て来て梅野帯刀一味を助けたので大いに力を得、ついに左近太夫は春日山城に退いた。

これによつてますます勢付いた山内勢は三方から城に攻入つて火を放つたので、左近太夫始め戦死者が続出しついに春日山城は落城した。

落城の報を佐嘉城で知つた小川信安はくやしがり「勝利の首をはね一族にたむけん」と息まき、十月十五日手兵を残らずひきい北を指して鞭をあげた。隆信は信安の様子がただ事ではないと察し「筑後（信安）を討たすな、自身も出馬すべし」と後を追つて兵を進めた。信安は山内の梅野弾正を味方に引き入れ、道案内として金敷峠に到着した。ここに着いて信安が見たものは弟達の死体だけで、山内勢はずでに去つた後であった。信安は山内に進撃を唱えたが家臣に止められ止むなく春日城へ歸つた。

一方、勝利は高野岳で鐘をつかせ諸勢を集めた。またたく間に小副川の寄合平に集まつた。勝利は軍勢を二手に分け、嫡子長良の一軍を名尾に向かわせ、福島周防守・神代備後守兄弟・松瀬父子・栗並・小副川・合瀬・名尾以下、山伏東坊達を合わせて千三百余人を与えた。また、勝利は三反田に通ずる道を指し、福島弾正・神代中務・同左馬助・三瀬兄弟・杠・菖蒲・畑瀬・千布以下千七百人余を従えて大野原を通つて熊野岳に陣をしいた。

翌十六日早暁、小川筑後守信安は従者一人を連れて神代勢の陣立を見ようと金敷峠の尾根に出たところ、同じく陣立を見るため川浪駿河守に槍を持たせてやって来た神代勝利とばつたり出合つてしまった。双方槍をとつて戦つたが一騎打ちが出来ない狭い地形で、左右は深い谷となり従者も助太刀が出来ない烈しい戦の末、信安は勝利の槍に貫かれた。以上は「九州治乱期」にのつている金敷峠の戦いである。

金敷山（四二五メートル）の頂上には小川筑後守らの墓が建てられている。

同武藏守信俊
小川筑後守信安神儀
（表面）
同市左衛門尉家俊

天正十二甲申三月二十四日
弘治三丁巳十月十六日
（裏面）
文祿二癸巳六月十二日



小川信安らの墓

向かって右の開戸

三霊神龍造寺鍋島之二氏仕無一勲功顕然終三代共於戰場遂忠死畢至死忘後武門閏光輝故神靈国家令守護事無疑依而先祖戰死場於金敷峠嶺仰小岳明神国家並小川氏守護神奉崇者也

天明六丙午年春季春吉詳日 敬白

向かって左の開戸

小岳明神

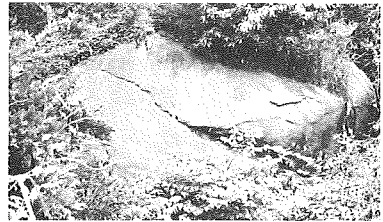
向かって右側面

天明三癸卯三月二十一日建立

小川半助俊顕

東後の墓石

右側面 弘治三丁巳十月十六日戦死



駒隠しの岩

前面 江副新八郎信英魂

左側面 建立 江副松之進保忠

江副伊織栄紹

後方自然石の墓石（右側）

小川筑後守

水町右馬助

中元寺新左衛門

同 （左側）

三界万霊

前方に倒れている墓石

大乘明典六万部

中元寺新左衛門

6 川上の戦

金敷峠の戦は龍造寺軍の惨敗に終わった戦であるが、その翌年の永祿元年（一五五八）十二月三日一旦は河上社に連署の願文を捧げて、肥前の平安と両家の融和を祈り、社殿造営のことを約束しているが、

口伝によっても、西肥古蹟の詩を読んでも、その日筑後守信安以下八十人は黒衣を着け自軍の目印として敵と戦ったが、勝利の兵が強くてついに全責討取られたとある。

右の墓石は佐嘉城を向いて建てられ、今は墓石の所在すら知る人も少ない有様である。

むら雲の 消えし嵐の 跡とへば

苔むす石に 名をのこしけり

金敷峠に行く中腹の谷間に小川党の武将が退路を失ない大岩に隠れていたが、馬のいななきのため敵に発見され戦死したと伝えられる「駒隠の岩」も、樹林の中に古りし世の戦を秘めたまま苔むしている。

結局それも空文にすぎなかった。永祿四年（一五六一）九月上旬隆信は使いを神代勝利にやった。

「吾は御辺に對し、うつぶん片時も止む事なし。所詮有無の一戦を遂げて両家の安否を極むべし。されば今月十三日、山と里との境なれば河上へ出合われよ。勝負を決し申すべし。」

これを受けた勝利は「仔細に及ばず」と返答した。

その後又勝利から河上駿河守を龍造寺へやって、いよいよ九月十三日河上で出合い、勝負の程を試み候べしと言いつつ。かくて隆信は九月十三日早晩八千余を率いて城を出、軍を三つに分け河上へ押し寄せた。都渡城口へは舎弟左馬守信周、従弟左衛門佐鑑兼、小川大炊助信女以下二千余騎で向かい、大門口へは納富俱馬守信景を大将に二千五百余騎、川にそい松原に寄つて押寄せ、隆信は三千五百余騎で西山田から大手宮原口へ押寄せた。旗本の先陣は広橋一祐軒信了、二陣は福地長門守信重、三陣は旗本、後陣は龍造寺兵庫頭長信であつた。一方、勝利は熊の川の城で勢揃いし、総勢七千余騎、先ず勝利は三瀬内蔵助武家、同安家、古川佐渡守、同新四郎、嘉村讃岐守父子、畑瀬越前守父子、その外恒松、島田、菖蒲、栗並以下二千余騎を引連れ、淀姫社西の総門を本陣とした。

大手宮原口には嫡子刑部大輔長良を大将にして、神代備後守、同豊前守、同兵衛尉、福島周防守、同伊賀守、中島上総介、千布因幡守その外江原、梅野、国分、小副川、一番瀬を始めとして三千余騎で固めた。都渡城口へは三男清次郎周利に八戸宗暘をそえ西河伊豫守、古湯、杉山、鹿路、大野、千葉介の家人合わせて一千五百余騎で固めた。

かくて十三日辰の刻（午前八時）過ぎ、先ず宮原口で戦が始つた。龍造寺軍の先陣は宮原口に近付きつつあつたが、神代長良の先陣からときの声をあげて弓、鉄砲をうちかけて来た。龍造寺軍の先陣広橋信了は士卒を励まし一步も退くな、かかれかかれと下知した。しかし、神代軍の勢が強く龍造寺軍は南の方へなだれを打つて退却し、広橋入道も戦死したようである。隆信は平素から「先陣の敗は二陣の不覚、先陣の勝は二陣の手柄」と定めていたので、広橋のこの後退を見ると二陣の者を叱りつけ、自ら采配を掲げて馬を榎木口に乗り出し、馬回りの軍勢を先陣と入れ替え「二陣を頼りにするな、進め、進め」と激しく下知したので、四人の荒武者を先に旗本の将兵も我先にと進み、やがて二陣の福地長門が指揮する五百余人と入れ替つた。この時、山内勢から武藤左近将監と名乗つて、長門に突つかかつてきた者がいた。長門はよき敵なりとはかり槍をさしこいて一騎討ちの末、武藤は受け損じ胸板を突かれて倒れた。長門の家来小林播磨守が走つてきて首を打落した。この外大庭石見守は神代中務丞を射倒し、又納富、北島、空閑の諸将も軍功をたてた。

南大門松原でも戦が始まつて、神代兵部と納富但馬が火花を散らしていた。だが神代軍の東方を守る都渡城の陣に變心者が現われ、大将の清次郎を刺殺したので、この方の神代勢は乱れ立ち、一方宗暘も負傷して山内へ退いた。龍造寺軍は川をかけ渡つて納富信景の攻め口南大門に押し寄せ、神代種良の陣を横から攻めたので、さしもの山内勢も東南に敵を受けかね敗色も濃くなった。松瀬能登守、馬場四郎左衛門を始め討死し、大将神代種良も御手洗橋の辺りで討たれ、南大門軍は全滅したので、龍造寺軍は

更に勝利の本陣である西の総門へと攻め込んだ。ために勝利もついにこらえきれず八反原に退いた。宮原口ではなおも戦が続いていたが、長良もついに負けて北に逃れ、かくて神代父子は熊川城へ入った。龍造寺軍はなおも勝利を追撃しようとしたが、東は大川、西は山が迫った細道という場所のためついにあきらめて帰城した。

隆信は金敷の無念を晴らし、大いに喜び勝どきをあげ、下於保で生捕の者を成敗し佐嘉へ帰陣した。

7 河上社造営

応仁の乱（一四六七年以来十一年間、京都を中心に続いた戦乱で京都は焼野が原となった）以来河上社の御神体は仮殿に奉納したまま荒れるに任せ雨もりさえなおす人はいなかった。

肥前国賀世庄（今の嘉瀬町か）に蓮乗院増純という僧がいた。この僧は後に元龜三年（一五七二）実相院三十五世として、元龜戦火後実相院再興に活躍した座主である。河上社の荒廃を嘆き一念發起してその復興に寝食を忘れ活躍した。永禄の年（二五〇〜二五九）増純は仮殿にこもり、塩絶ち・米絶ちして当宮造営の祈願をした。十七日夜疲れて夢うつつの時、容顏麗しき天女忽然として夢枕に立ち「殊特妙好なる大願を思い立ちたるものかな、我感喜に堪えず……」と称して粟の一穂を与えられ夢がさめた。増純は不思議に思い、神の加護を信じ、この善願を達成する事こそ神に報ゆる道だと誓った。早速大工に命じ建築を始めた。信者の奉仕も多く資金も集まった。大宮殿、末社の宝倉、端門、西門、拝殿、鐘楼、本地堂、御穀屋、衝門、瑞籬、講堂に至るまで黄・黒・朱のうるし塗りで飾り「絶妙の壮嚴、奇麗の壯

観測り難く」とあるから余程立派な河上社が完成したに違いない。五、六年間に建て終わり遷宮供養まで勤めている。造営の当初材木を物色して山々を探し求め、ついに小城郡今山（大和町今山）の地に樟の大樹を発見した。幹の周りが十人でまわしてもなお余ったという大樹であった。この一本で造営を成しとげ得たことは、神助の加護と増純苦行の賜だと結んである。この結構な建物も数年後の元龜元年（一五七〇）には大友軍によって焼かれた。現在残っている西門は樟材の柱とその一部が原材で、他は数度の修理によって杉材等が使われている。（実相院文書より）

8 大友軍第一回の佐嘉城攻め

大友宗麟が佐嘉龍造寺を攻めて来たのは永禄十二年（一五六九）と翌元龜元年（一五七〇）の二度にわたっている。永禄十二年春、宗麟は大軍を率いて筑後の高良山に陣し、一部の兵力をさいて戸次鑑連、臼杵鑑速、吉弘鑑理らの部将を肥前攻略に差向けた。龍造寺をとりまく東部の江上、馬場、横竹、北部の神代、高木、西部の部将等すべてが大友軍に加わったため、佐嘉城は海陸から包囲される形となった。そこで隆信は大友に和睦を申し入れたが聞かれなかった。

佐賀平野の北部山麓に陣をしいた大友勢は四月上旬、村々の民家や堂塔を焼き払って佐賀の北部に押寄せ、この方面で若干の合戦が行われた外、佐賀の東部、東南部でも戦ったが大きな決戦にまで至らず、情勢が有利に展開して来た。それは毛利軍が安藝（広島県）をたつて山口県長府に入り、同じころ吉川元春と小早川隆景の軍が筑前に入って龍造寺軍を助け、はさみうちの陣形をとつたので、大友は不

利を知り、今度は大友宗麟から隆信へ和議を申し入れた。互いに人質を取替して和平が成立した。

9 大友軍第二回の佐嘉城攻め

九州に派遣していた毛利軍の虚をついて毛利の本国をおとしいれようと、尼子、大内氏らの動きに毛利元就は急いで九州に派遣していた兵を一部残して引上げたので、大友勢は好機再来と喜んだ。更に翌元龜元年の春、肥前から人質となつて豊後に赴いていた秀島四郎左衛門家周がひそかに逃げ帰つたので、宗麟は非常に怒つて今度こそ龍造寺を叩きつぶすぞとまたまた高良山に本陣をすえ、戸次、臼杵、吉弘の三部将は三月二十九日相並んで肥前に進入した。豊後・豊前・筑前・筑後はもとより肥後・日向の軍勢も加わり、肥前のお大半、松浦党の面々までほとんど大友軍に属し、目と鼻の神代、八戸氏らまでこれに応ずる始末で、七か国の海陸包囲軍の総勢八万と称し、これを守る龍造寺勢は城兵わずかに五千に足りない小勢で、まさに風前の灯火である。決戦の日は刻々と迫ってくる。

(1) 今山の戦

元龜元年（一五七〇）八月中旬になつて宗麟は大友八郎親貞を総大将として包囲軍を統率させ、佐嘉城総攻撃は八月二十日（陽曆九月二十九日）と定つた。

※八郎親貞については「肥陽軍記」「九州治乱記」によると、宗麟の弟と書かれ、「親秀」という名は「九州治乱記」だけで、八郎晴英の誤りではないかと言われている。いずれにしてもはっきりしないが、宗麟の近親者であることには間違いない。

親貞は兵を率いて十七日に今山南方の八幡原（今の坊山）に本陣を置いた。八幡原は雑木林であつた。ここでは全軍を見渡す好適の場所ではないと思つてか、翌十八日東方の赤坂山麓に陣を替えている。

佐嘉城でもしばしばうって出て小ぜり合いがあり敵勢を撃退したが、十九日佐嘉城では最後の軍評定が行われた。開城説が多く、さすがの龍造寺隆信も止むなく筑後落ちを覚悟したかに見えたが、鍋島信昌（後の直茂）は十死一生の夜討ちを提唱した。成松信勝もこれに同意して、いよいよその夜龍造寺氏の運命をかけた夜襲を決行することになつたという。

「九州治乱記」によると、隆信の母慶闇夫人も六十才を過ぎていたが、軍評定の席へ出てくると「只今左衛門大夫（信昌）の申すところ、まことに結構と思う。私の見るところでは、城中の者は皆、敵の猛勢に吞まれ、猫に遇つた鼠のようだが、今夜敵陣に切り掛り、死生二つの勝負を決することこそ男子の本懐ではありませんまいか」と激励した。鶴の一声、隆信も決心して要撃に決し、直茂の今山夜襲となつたのである。これより先、成松刑部少輔信勝は直茂の命により、敵情を偵察して今山本陣では前祝いの酒宴最中であることを報じた。

直茂の夜襲決意については一つの小話がある。その前日直茂が敵情を見回つて兵庫村中野にさしかかると稲を刈っていた三人の百姓が

「どっち見ても豊後勢の旗ばかり、ふさましい（沢山な）人数のう」「人数は幾らあろうかのう」

「こいこそ、さんじゃあ牛（三才牛）の毛のしころあろうのう……」（数限りもなく多いという意）

「こぎやんとい巻かれてしもうちや、夜討ちかくつよいほかあんみやあで……、佐嘉のお城にや、夜討ちおめー立つもんもおらんかのー」

小耳にはさんだ直茂は神のお告げと喜んだ。すぐに腹臣に言付けて川上の山伏快春坊に秘策を授けた。心得たりと快春坊は今山の太友八郎の前にまかり出て、

「殿、御勝利とお告げを受けてまいりました。おめでとうございます」と、三十三才の若大将親貞を有頂天になしながら、

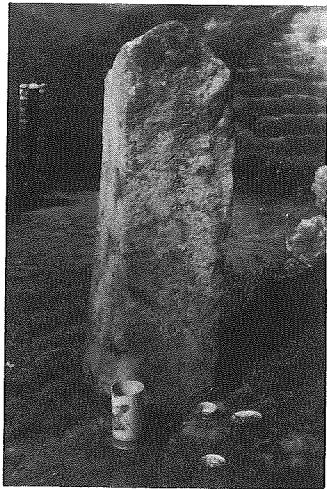
「ところでいつ総攻めをなされますか？」と何気なく問いかけた。「明十九日」と親貞が答えると快春坊はひとひざ乗り出して、

「えっ、それはいけません。明日は凶日ゆえ佐嘉に向っての城攻めはよくありません。御記憶でもございませうが、先年お味方の白杵新介殿がみすみす多布施まで攻め寄せながら、今一息というところで御敗北遊ばしたのも凶日を顧みず庶無二攻められた故でございます。明日の城攻めばかりはお見合わせ遊ばしますよっ」

と持前の弁説に馬力をかけて説き立てたので、親貞は怪しみます。明日が凶日なら一日だけ総攻めを延期して俎上(まな板の上)の魚の佐嘉城を肴に前祝もまた一興、明日一日は十分英気を養って総攻めは二十日と陣ふれした。してやったりと快春坊は、かくと直茂に連絡、直茂は喜んで夜討ちの部署を定めた。

納富但島守に二千の兵を授け、ひそかに嘉瀬川を渡って下於保村に待機させ、御大将龍造寺隆信の千余騎は西高木に陣取った。直茂は十九日の酉刻(午後六時過ぎ)に城から西を指して馬を走らせていた。従う者は秀島淡路、成松刑部、倉町大隅、同近江、諸岡尾張、納富越中、石井伊豫、安住安藝、円城寺

美濃らの勇士十七騎で、今山夜襲の快報はたちまち各地に伝わって、城下、道祖元町の百武志摩守賢兼の手勢十余騎が加わり、鍋島村では成富甲斐守信種(茂安の父)、伊東兵部少輔家秀らが合流して、早くも二百余人となり、名も縁起のよい勝楽寺で、旗竿の竹を切って幸先を祝い、藤折村(三日月町藤織)では早手回しに直茂から知らせてあった芦刈村の鴨打陸奥守胤忠の一隊、小城の今川ら馳せ参じ、今山



大友親貞の墓



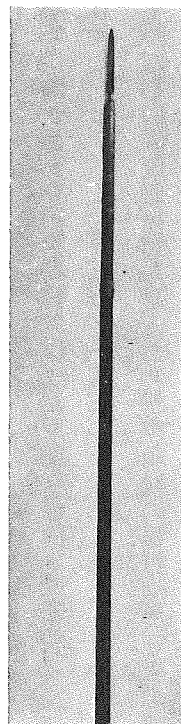
大友親貞従者の墓

に着いた時には総勢七百余人に達した。中腹に深いけがあるのを直茂が真先に槍を突き立てて飛び越え、次々に向う岸に駆け上って、八月二十日夜明け前、どっとばかりに本陣に切込むと、不意を打たれて敵は敗亡、しかも宵のうちの大酒宴で酔眼もろろうとして足元

も定らず、大将親貞の旗下も備えを立て直す暇もなく、押合いへし合い東へ東へとなだれて行く。立ち直った者も意気全く振わず、大将親貞はさすがに踏止って奮戦したが力及ばず、血路を開いて主従わずか四人で裏道伝いに遁れるところが成松信勝らが待ち伏せ、六人が同時に掛って討ち取り首級をあげた。時に直茂、親貞共に同年の三十三才であった。

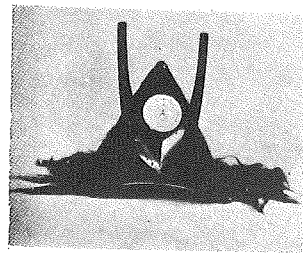
親貞が酒盛りをしていた場所は現在「酒盛り塚」として伝えられ、船塚古墳の東、新堤の西北を上る道路に接したなだらかな丘というから今の赤坂登り口、柑橘園一帯であろう。本陣斬り込みの合図に法螺貝や吊鐘を鳴らしたようで、これを合図に下於保に陣していた納富勢も鬨の声をあげて攻め入った。男女神社上段の鐘掛松も今は枯れて跡かたもない。信昌は今山の敵をことごとく追い散らしたあと、龍造寺側の軍勢一千余が豊後勢を攻め立てたので大友勢は東西南北に敗走し、田にすべり川に落ちて太刀を合わす者など一人もいなかったという。以上は「成松戦功略記」「肥陽軍記」「九州治乱記」によったものである。

それから丁度百年後の寛文九年（一六六九）八月二十日（新曆九月十五日）の百年忌に際して、高城



成松信勝の槍
大友親貞を討取った槍
(鎌倉市 成松氏蔵)

寺の住職は親貞主従の墓を赤坂山麓に建立した。後年親貞の墓は成松信勝の子孫の希望で更に高い



大友軍武將の「熊の毛の兜」



成松信勝に与えた降信の感状（成松氏蔵）

赤坂山の頂上に移された。今は山全体が密柑山で頂上まで舗装された道が続いている。山頂の大友公園には親貞の墓と大和町が建立した「今山古戦場」の碑が並び建てられている。親貞の墓は自然石で、碑面に「無庵玄鑑居士」の法名が刻まれているが、三百年の星霜に碑面の文字も定かでない。麓には従者の墓と言われる三基が残されている。

上掲の写真は成松信勝が龍造寺隆信からもらった感状である。

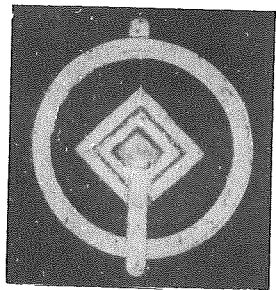
去廿日於今山豊州陣切崩刻抽粉骨人躰大友八郎方被討捕之段高名無比類候弓矢静謐之砌可加扶助候別而辛勞之趣向後不可忘却之状如件

元龜元年

八月廿六日 隆信（花押）

成松刑部少輔殿

又敵將大友親貞を討ち取った時に使用したと伝えられている槍は径三センチの木柄、全長四三センチ（二間半）で、穂先は一六・三センチの直槍、平肉に独鋸の彫物があり、中心には「相州住周廣」の銘



成松家鎧櫃の家紋
(薬研子)(成松氏蔵)

がある。この槍は県立博物館に寄託されている。

左の図は今山の合戦における両軍の配置の状況である。



(2) 河上神社焼かる

元龜元年、神代長良は大友と話し合って手引きし、龍造寺攻略のため大友親貞を総大将とする大軍が山麓一帯に布陣した。大友は元来ギリシタンであるため、神仏をきらい敬神崇祖の念など全くない。彼ら軍兵は社内に乱入したうえ、御宝殿金を盗み、九層の塔、経蔵、鐘楼、門、廻廊、末社の宝倉、拜殿、仏堂、瑞籬に至るまで、宏壮麗美の社殿を宋本の一切経と共に焼払った。五智如来、運慶作になる水光地藏尊も同様災禍にあった。講衆、神官、祢宜、神士等神社に勤めていた人々は、賊軍を恐れて山野に逃れ、御神体を出し奉る人もいない。かかる時、官司増寿という者、猛火に飛び込み御神体を出し奉り、合わせて百余通の証文、神宝等を無事取り出した。勅許の繪旨、院宣、裁定の通牒、奉書など文庫に一ぱいあったがことごとく焼失した。

その後幾程もなく、豊後の大将大友親貞は今山にて討たれ、一門ことごとくあるいは戦死あるいは自殺し敗北した。合戦は時の運とはいえ、無道を強行し、大社に放火した神罰はてき面で神霊を恐れぬ者はなかった。昔、神代勝利は当社に祈願し霊夢を受け、小城山、佐嘉山、神崎山とも領地となったが、その神威を忘れ、豊後衆を手引きして当社を焼かせた神罰によってか、戦うごとに破れ山内を去り、筑後国草野に住居し、これによって肥前国も平穩に治まり、龍造寺家も隆盛になっていった。

(以上実相院古文書より要約)